

うである。よって、'86-S T 1・'93-S T 1の須恵器双耳壺の時期は9～11世紀代の広い時期幅でとらえておき、より細かい時期の断定は今後の検討課題として残しておきたい。

須恵器双耳壺では明確な時期は決めがたいが、'93-S T 1・2にみられる土師器甕から時期が捉えられる。これらの土師器甕は成形・調整に同様の特徴をもち、口縁部がくの字状に外反し、内外面に丁寧なナデを施している。同形式の土師器甕は香々地町信重遺跡⁽²³⁾ S K18において出土している。S K18からは共伴する遺物がみられないが、S K18周辺の遺構がほぼ9世紀代に限定できるため、9世紀代の所産であると考えられる。これは、'93-S T 2において共伴した須恵器壺が9世紀前半代であることも一致し、'93-S T 1・2や大きさや器厚が異なるものの形態・調整が同じである'94-S T 3も同時期のものであると推測できる。それゆえ、この土師器甕と共伴している須恵器双耳壺も9世紀代に収まるものと考えられよう。

まとめ

以上の検討項目を整理すれば、以下のとおりである。

まず、木櫃の火葬墓が2基、森山遺跡の丘陵の南側斜面8合目あたりに営まれ、この周辺により低い位置に土師器甕型土器・須恵器双耳壺を骨蔵器として利用した火葬墓が続いて営まれている。木櫃の火葬墓は8世紀前半～中葉に収まるものであるが、その前代には墓地あるいは居住地などの遺構は全く確認できておらず、火葬墓の下限は9世紀代に下る。また、森山遺跡の特徴を論じるにあたり、8～9世紀に継続して営まれた森山遺跡は火葬墓が群集するのに対し、これと時期的に重複しながら、やや下る9～10世紀の寺迫遺跡火葬墓や寺迫遺跡の東方約200mの丘陵斜面において発見された大谷火葬墓などにおいては、単独で営まれている可能性が高いことがその特徴として捉えられる。

(2) 二豊地域における古代火葬墓

以上、整理した森山・寺迫遺跡の火葬墓群の実態をふまえて、二豊地域における古代墳墓のなかでの位置付けを行いたい。

まず、火葬墓であるが、その分布域は1978年度に上野精志が集成して以来、ほとんど変化はない。⁽²⁴⁾ 豊前地域においては南部に集中しており、特に中津平野・宇佐平野周縁部の台地・丘陵に多く確認されている。不時発見の火葬墓はすべてが須恵器製骨蔵器であり、詳細な出土状況や出土地点、あるいは群中での位置関係などほとんど不明と言わざるをえない。そのため、確実な資料として発掘調査における火葬墓の検出例を俎上に載せ、二豊地域における古代墓地における森山・寺迫遺跡火葬墓群の位置付けを行いたい。

二豊地域における終末期古墳の様相

二豊地域の発掘調査における火葬墓検出例は、福岡県椎田町広幡城跡⁽²⁵⁾・同新吉富村中桑野遺跡⁽²⁶⁾・同大平村穴ヶ葉山遺跡⁽²⁷⁾・大分県中津市勘助野地遺跡⁽²⁸⁾・同中津市永添遺跡⁽²⁹⁾・同佐伯市白濁遺跡

などがあげられる。中桑野遺跡を除いては、いずれも複数の火葬墓が確認されており、⁽³⁰⁾その多くが群集することがわかる。永添遺跡では古墳時代終末期の方墳群との系譜上において火葬墓が出現・展開し、また、勘助野地遺跡においても、火葬墓群が営まれる直前まで隣接地の上ノ原横穴墓群が営まれている。それゆえ、火葬墓という古代においては新進の墓制でありながら前代の古墳時代の墓制を受け継ぐ様相をもつため、以下では、二豊地域における終末期古墳から火葬墓の造営まで継起的に辿り、火葬墓の実態に迫りたい。

終末期古墳に対し、はじめて問題提起をしたのは森浩一であり、6世紀末～7世紀初における多くの群集墳の造営停止以降を古墳時代の終末期と位置付けた。そして7世紀中葉を境にそれ以前は一部の群集墳の造営・追葬がおこなわれ、以後には小型化した横穴式石室や横口式石槨が続く特徴をもつため、7世紀中葉以前を終末期前期、以後を終末期後期とした。⁽³¹⁾終末期の古墳の動態に関しては多くの先学が同様な見解を示しており、定説化しているものとみてさしつかえないであろう。ここでは終末期古墳を論じた諸先学の業績を辿るだけの紙面がないため、二豊地域における火葬墓造営直前に位置付けられる終末期後半の古墳群について取り上げてみよう。

二豊地域における終末期後半の古墳は、豊後地域においては、唯一、大分市古宮古墳において発見されている。古宮古墳は横口式石槨を内部主体にもつ一辺約12mの方墳であるが、畿内以西においても極めて稀な古墳形態であり、二豊地域においても唯一の類例であるため、律令制下的高级官人を葬った古墳であると位置付け、『日本書紀』天武天皇条に散見される「大分君恵尺」・「大分君稚臣（見）」を被葬者に比定する考察もある。⁽³²⁾もちろん豊後地域における終末期古墳は古宮古墳のみであるとは限らず、今後の調査の進展に委ねられるものであることは言うまでもない。

豊後地域に比較して豊前地域では後期群集墳・横穴墓群の系譜上において位置付けられる終末期後半の墳墓が数遺跡で確認されている。古墳では福岡県椎田町石堂中後ケ谷古墳群・同菜切古墳群・同頭無古墳群⁽³³⁾・大分県中津市永添遺跡などにおいて、また横穴墓では福岡県行橋市竹並遺跡⁽³⁴⁾・同前田山遺跡⁽³⁵⁾・大分県中津市上ノ原横穴墓群などにおいてそれぞれ確認されている。石堂中後ケ谷古墳群・菜切古墳群・頭無古墳群はいずれも小型の横穴式石室を主体部にした円墳から形成されており、それぞれ隣接する丘陵上に7世紀前半から造墓活動を始め、8世紀前半に造墓・追葬を終えている。また、永添遺跡では上ノ原横穴墓群と同一台地上に営まれており、周辺部に古墳時代を通じて古墳が築造され続けている。終末期後半の古墳形態に限れば7世紀代から8世紀前半代まで小型の横穴式石室を主体部にもつ方墳が築造されている。上ノ原横穴墓群では墳墓形態を変えながら、古墳時代を通じて営まれた墓地であり、5世紀後半以降、横穴墓に移行する。6世紀代に盛期をむかえた横穴墓群は終末期後半である7世紀中葉以降は2基の横穴墓に追葬がみられ、8世紀代に至り、1基のみ新たに小型の横穴墓が築造されてい

る。竹並遺跡・前田山遺跡も同様に古墳時代後期に盛行した横穴墓が終末期に至っても激減しながら営まれ、若干例が8世紀前半代まで築造あるいは追葬されていることがわかる。

以上の終末期後半の古墳群において上ノ原横穴墓群・永添遺跡では古墳および横穴墓の築造・追葬を終えた直後に火葬墓群が造営されており、墓地としての役割が棄てられていない。これに対し、石堂中後ケ谷古墳群・菜切古墳群・頭無古墳群・竹並遺跡・前田山遺跡などでは古墳の終焉とともに墓地としての歴史的役割を終えたようであり、以後、火葬墓をはじめとした墳墓はみられない⁽³⁷⁾。これについて石堂中後ケ谷古墳群・菜切古墳群・頭無古墳群・竹並遺跡・前田山遺跡などにおいては被葬者の系譜が途絶え、上ノ原横穴墓群・永添遺跡などにおいては、当地に継続して蟠踞し続けたとも考えられようが、前述したように、火葬墓分布の地域性を考慮した場合、分布域の外に位置する石堂中後ケ谷古墳群・菜切古墳群・頭無古墳群・竹並遺跡・前田山遺跡などにおいて被葬者の系譜が途絶えたとはあながち断定できない。花田勝広は河内地域において終末期古墳から火葬墓への構造・葬法変化を論及し、文献あるいは墓誌にみられる古代氏族の墓域の動向を究明している⁽³⁸⁾。しかし、当地域においては明確に古墳群および火葬墓群とその被葬者集団である氏族とが対応できるような資料が見られず、比定したとしてもあくまでも推測の域を出ないのが現状である。それゆえ、終末期古墳の段階で墓地としての機能を終えるもの、終末期古墳から継続して火葬墓群が営まれるもの、前段階に古墳は全く見られず火葬墓の出現により墓地としての機能が与えられるものなどの違いに関しては、検討すべき課題として念頭に置きながら論を進めたい。

二豊地域における奈良～平安期の墓制の展開

それでは火葬墓群が営まれた墓地はどのような様相をもつのであろうか。二豊地域においても全国的動向と同じく、古墳・横穴墓が消滅する8世紀前半に火葬墓が出現しており、出現期の火葬墓は須恵器短頸壺・木櫃墓などが主体部として確認されている。これらは、詳細な時期がおさえられないため、複数の系列があるものか、単一の系列であるものかは明らかでない。しかし、8世紀前半～中葉に出現する火葬墓は9世紀前半まで群をなし営まれており、永添遺跡では終末期の方墳の並びの前面に墓道が想定でき、この墓道に想定できる位置の前面に8世紀中葉から9世紀前葉までの火葬墓が6号火葬墓→4号火葬墓→3号火葬墓の順序で営まれているため、被葬者は終末期古墳から引き続く系列で造営されたものと考えべきであろう。

また、勘助野地遺跡では前段階に上ノ原横穴墓群の最終末の横穴墓の時期に次いで営まれていることがわかる。上ノ原横穴墓群では唯一、55-B号横穴墓において8世紀前半代の横穴墓が確認されているが、55-B号横穴墓は55-A号横穴墓・54号横穴墓の系譜上にあり、武器所有形態から階層差を検討した場合、上ノ原横穴墓群を総括するリーダー的存在であったことがわかる⁽³⁹⁾。それゆえ、上ノ原横穴墓群を総括するリーダーの系譜にある人物にのみ、8世紀に至っても横穴墓が造営しえたと考えることができよう。この55-B号横穴墓がみられる上ノ原横穴

墓群Ⅰ区上の台地縁辺の平坦地に勘助野地遺跡の火葬墓群が営まれているが、火葬墓群のうち最も古いものとして3号火葬墓がみられ、8世紀前半代に比定できる。以後、2号火葬墓→1号火葬墓→4号火葬墓→5号火葬墓の順序で営まれ続け、火葬墓の終焉は9世紀前葉であることがわかる。

穴ヶ葉山遺跡では、6世紀末～7世紀前半代に築造されたと考えられる穴ヶ葉山古墳群中に4基の火葬墓が検出されている。穴ヶ葉山古墳群中には1号墳のように線刻壁画をもつ全長10mに達する巨石墳が含まれ、在地有力者の奥津城であることがわかる。調査面積が狭いため、穴ヶ葉山古墳群と火葬墓群の間に営まれた墳墓は確認されておらず、そのため、火葬墓群の被葬者が穴ヶ葉山古墳群の被葬者の系譜上にあるものか否かは今後の検討課題であろう。しかし、穴ヶ葉山古墳群が存在する丘陵一帯には終末期に属する古墳が存在しており、個々の古墳相互の系譜関係は追えないものの、古墳群から火葬墓群に至るまで継起的に営まれているものと思われる。火葬墓群の広がりも周辺部に延びる可能性があるが、現時点で確認されている穴ヶ葉山遺跡火葬墓群は8世紀中葉～後葉に収まるものである。この穴ヶ葉山遺跡が存在する丘陵地帯には平山火葬墓群⁽⁴⁰⁾・東山火葬墓群⁽⁴¹⁾などもみられるが、これらについても8世紀代におさまる須恵器短頸壺が複数出土しており、群集形態をとっていたものとおもえる。それゆえ、穴ヶ葉山遺跡一帯の丘陵地においては、8世紀代に複数単位の火葬墓群が営まれていたと考えられよう。

白濁遺跡においては丘陵斜面に9世紀代の4基の火葬墓が群をなして営まれているが、その前代に古墳をはじめとして墳墓は全く営まれていない。

以上、述べたように群集形態をもつ火葬墓群は8世紀前半～中葉の火葬墓出現から9世紀前葉にかけて累代的に営まれており、明らかなものとして永添遺跡・勘助野地遺跡などのように古墳時代終末期後半の古墳・横穴墓の系譜を受け継いでいることが分かる。それゆえ埋葬主体は違えながら、古墳時代終末期後半の古墳・横穴墓の累代墓の様相は9世紀代まで続くものと考えられよう。しかし、広幡城跡などのようにその前代に墳墓等が全く見られない遺跡も存在するし、石堂中後ヶ谷古墳群・菜切古墳群・頭無古墳群などのように古墳の終焉とともに墓地としての歴史的役割を終える遺跡もみられるため、当然のことながら火葬墓の出現も古墳時代終末期以降の墓制の画期になることは間違いない。

このような群集形態の火葬墓とは異なり、単独で営まれる火葬墓もみられる。中桑野遺跡では周辺部も広範囲に調査しているが、10世紀後半～11世紀前半におさまる骨蔵器が単独で出土しているのみであり、寺迫遺跡⁹⁶-S T 1も同様に単独で営まれている。不時発見の火葬墓をみても、単独で出土しているものの多くは9～10世紀に収まり、発掘調査による成果とは様相を異にしない。

火葬墓の造営時期とその特徴を整理すれば、前述した穴ヶ葉山遺跡・平山火葬墓群・東山火

葬墓群・勘助野地遺跡・永添遺跡に加え山本火葬墓群など8世紀代に営まれている類例のほとんどが群集形態をとり、ほぼ9世紀代までには造墓を終える傾向をもつ。これに対し、発掘調査により明確に単独で検出された火葬墓は8世紀代に溯る資料は見られず、不時発見の資料が多いが、9～10世紀に収まる火葬墓は白濁遺跡例以外には群集形態をもつものはみられない。火葬墓造営の変化とともに類例は少ないが、9世紀代には大分県下綾垣遺跡⁽⁴²⁾・馬場遺跡⁽⁴³⁾のように土壙墓（木棺墓）がみられる。これについても単独で営まれており、火葬墓と同様である。

二豊地域における森山遺跡火葬墓群の位置付け

以上の二豊地域での火葬墓の実態を念頭に置きながら森山・寺迫遺跡の火葬墓群を考えた場合、森山・寺迫遺跡が位置する丘陵上において火葬墓出現以前には系譜関係をもつと思われる古墳の築造は全く見られず、8世紀代から営まれる火葬墓群の前代に終末期の古墳がみられる遺跡例が多い中においては、森山・寺迫遺跡や広幡城のように火葬墓造営以前に墳墓地として位置付けられていない遺跡は数少ない。しかも、その主体部の形態は木櫃・土師器甕・須恵器双耳壺と多様な群集形態をもつことがわかり、他遺跡の8世紀に群集形態をとる火葬墓群が須恵器短頸壺を主体部としてもつことと比較すれば様相を異にする。

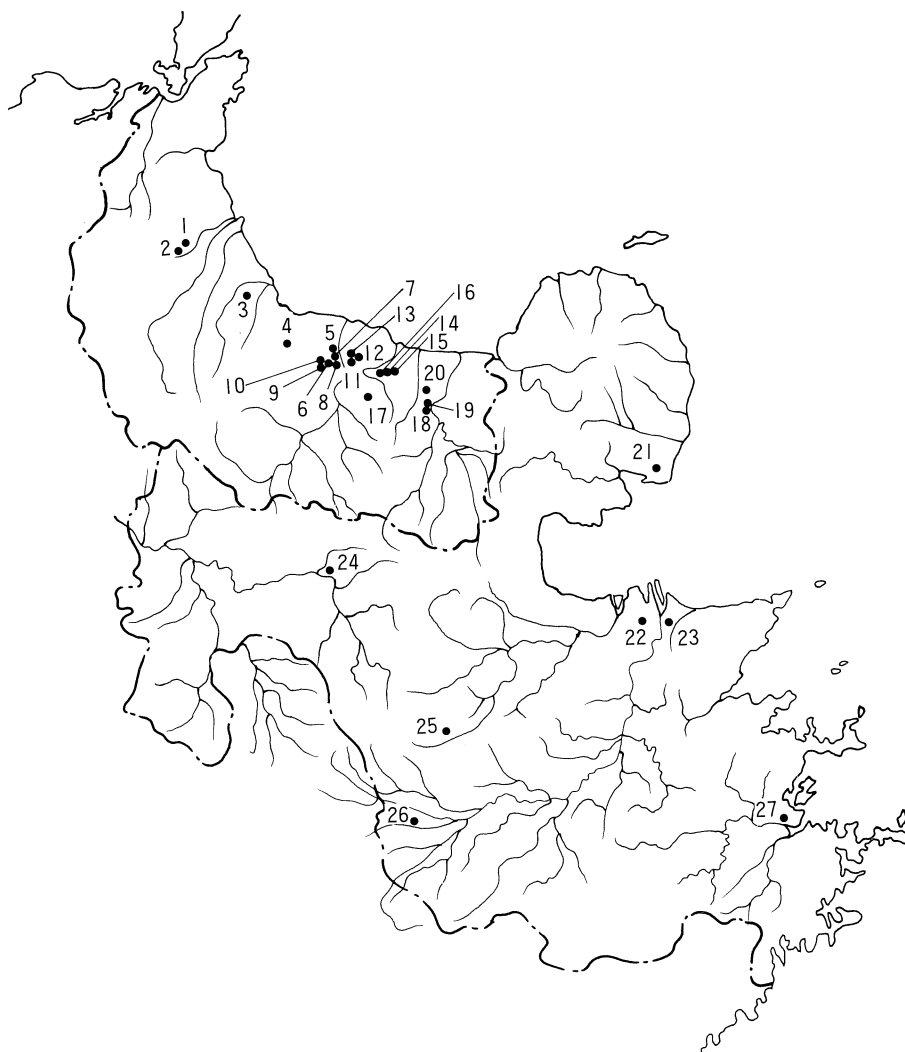
このような、森山遺跡火葬墓群の様相の違いにはどのような背景が存在するものであろうか。職掌や階級・階層差など様々な視点から捉えられ、埋葬方法や主体部形態の優劣や占有面積の広さなどがそのまま反映されているものかもしれないが、未だ検討するに足る資料数であるとは言いがたい。今後、新たに火葬墓群の発掘調査例が増加することにより、森山遺跡火葬墓の小地域内での位置付けも含めて二豊地域における火葬墓の実態が明らかになっていくものであろう。（原田）

註

- 1 村上久和「森山遺跡」『一般国道10号線 中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書（3）』大分県教育委員会 1992年
- 2 植田由美『森山遺跡』三光村教育委員会 1994年
植田由美氏の御教示によるところが大きい。
- 3 小林昭彦「寺迫遺跡」『一般国道10号線 中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書（3）』大分県教育委員会 1992年
- 4 昭和62年度、大分県教育委員会発掘調査により火葬跡とされた遺構は、その遺構の大部分を削平により失っており、不明な要素が多い。村上久和氏の御教示によれば土坑の形態や埋土、須恵器蓋の出土など、今年度、検出された木櫃の火葬墓と類似した様相をもつため、木櫃を納めた土壙であった場合や、本来、骨蔵器を納めた土壙でありながら、土壙のほとんどが削平されているため、骨蔵器を失い、床面付近のみ残存した場合など、墓そのものであった可能性も考えられる。また、植田由美氏の御教示によれば平成5年度、三光村教育委員会調査区から骨片が出土している箇所が認められ、ほかにも火葬墓が存在していた可能性が考えられる。

- 5 村上久和「火葬と窯業集団」『三保の文化』第42号 三保の文化財を守る会 1986年
- 6 小田和利『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-24-』福岡県教育委員会 1992年
- 7 宮小路賀宏編『西谷火葬墓群』久留米市教育委員会 1971年
- 8 宮小路賀宏「野田遺跡」『日本考古学年報 25 (1972年版)』日本考古学協会 1974年
- 9 鈴木重治「筑紫1号古墳」『日本考古学年報 25 (1972年版)』日本考古学協会 1974年
- 10 上野精志「都地原遺跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-VIII-』福岡県教育委員会 1977年
- 11 上野精志「火葬墳墓について」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-XX-』福岡県教育委員会 1978年
- 12 註11に同じ。
- 13 宮内克己「出土土器の編年」『弥勒寺』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1989年
- 14 佐藤浩司「奈良時代の須恵器と土師器-旧豊前国を中心として-」『東アジアの考古と歴史』下 同朋舎出版 1987年
- 15 武末純一「御祖窯跡」『天観寺山窯跡群』北九州市埋蔵文化財調査会 1977年
- 16 小田富士雄「荒堀火葬墓」『豊前市史 考古資料』1994年
- 17 川村 博「歴史時代の墳墓」『中桑野遺跡』新吉富村教育委員会 1978年
- 18 賀川光夫・小田富士雄『白濁遺跡』佐伯市教育委員会 1958年
- 19 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集 2』1976年
 森田 勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き(2)」『九州歴史資料館研究論集 3』1977年
 佐藤浩司「平安時代の土師器編年試案と地域相の解明にむけて」『寺田遺跡』(財)北九州市教育文化事業団 1988年
- 20 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書 第2冊 篠窯跡群』1984年
 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書 第11冊 篠窯跡群』1989年
- 21 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告 VII』1976年
- 22 吉田恵二「前川遺跡」『平城京朱雀大路発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所 1974年
- 23 後藤一重『香々地の遺跡 I』香々地町教育委員会 1994年
- 24 註11に同じ
- 25 伊崎俊秋編『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告-9-』福岡県教育委員会 1992年
- 26 飛野博文『穴ヶ葉山遺跡』大平村教育委員会 1993年
- 27 村上久和ほか「勘助野地遺跡」『一般国道10号 中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(I)』大分県教育委員会 1988年
- 28 栗焼憲児『1993年度 中津地区遺跡群発掘調査概報(VI)』中津市教育委員会 1994年
- 29 賀川光夫・小田富士雄『白濁遺跡』佐伯市教育委員会 1958年
- 30 広幡城跡では火葬墓は1基のみ確認されている。しかし報告者も指摘されているように(註25)周辺から骨蔵器に使用したものと思える須恵器壺片が数個体出土しており、火葬墓は群をなしていたものと想定できる。
- 31 森浩一「葬法の変遷によりみた古墳の終末」『末永先生古稀記念古代学論叢』1967年
 森浩一「古墳時代後期以降の埋葬地と葬地」『古代学研究』57 1970年
 森浩一「あとがきにかえて」『論集 終末期古墳』塙書房 1973年

- 32 真野和夫・讃岐和夫編『古宮古墳』大分市教育委員会 1982年
- 33 緒方泉編『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告－2－』福岡県教育委員会 1990年
- 34 竹並遺跡調査会編『竹並遺跡』寧楽社 1979年
- 35 長峰正秀編『前田山遺跡』行橋市教育委員会 1987年
- 36 村上久和編『上ノ原横穴墓群 I・II』大分県教育委員会 1989・1991年
- 37 竹並遺跡においては唯一、G-117号墓の墓道において8世紀代の須恵器短頸壺が出土している。このような須恵器短頸壺は、当地域においてはその多くが骨蔵器として利用されているが、当資料について、出土状況その他の詳細な報告がなされていない。これについて調査者のひとりである村上久和氏は、骨蔵器の可能性を指摘しているが(村上久和「群集墳と横穴墓の成立と展開」『終末期古墳の世界』北九州市立考古博物館 1993年)、人骨の有無など不明な点が多く、火葬墓としての認定およびその意義に関しては言及できず、今後の課題としたい。
- 38 花田勝広「律令制の確立にみる葬地の変革－河内地域の氏墓の様相を中心に－」『信濃』第40巻第4号 信濃史学会 1988年
- 39 村上久和・吉留秀敏「上ノ原横穴墓群における武器所有形態における階層変遷」『上ノ原横穴墓群』大分県教育委員会 1991年
- 40 註11に同じ
- 41 註11に同じ
- 42 須原緑ほか「下綾垣遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報-日田～玖珠間-』大分県教育委員会 1992年
- 43 小柳和宏『馬場遺跡』荻町教育委員会 1986年



第100図 二豊地域における奈良・平安期の墳墓分布図

表31 二豊地域における奈良・平安期の墳墓

No.	遺跡名	遺構番号	所在地	墳墓形態	出土遺物	時期	文献
1	黒田		福岡県勝山町黒田	火葬墓	須恵器壺	9～10世紀	1
2	中黒田		〃 中黒田	〃	須恵器壺	9～10世紀	1
3	荒堀火葬墓	1号骨蔵器	〃 豊前市荒堀	〃	須恵器長頸壺	8世紀初	2
		2号骨蔵器	〃	〃	須恵器双耳壺	9～10世紀	2
4	広幡城跡	1号火葬墓	〃 椎田町水原	〃	須恵器短頸壺・皿(蓋)	8世紀前半～中葉	3
5	中桑野遺跡		〃 新吉富村垂水	〃	須恵器双耳壺、土師器坏	10～11世紀	4
6	穴々葉山遺跡	1号火葬墓	〃 大平村下唐原	〃	須恵器短頸壺・蓋	8世紀後半	5
		2号火葬墓	〃	〃	須恵器壺	?	5
		3号火葬墓	〃	〃	須恵器短頸壺	8世紀中葉	5
		4号火葬墓	〃	〃	須恵器短頸壺・蓋	8世紀後半	5
7	下唐原火葬墓		〃	〃	須恵器短頸壺	8世紀代	6
8	金生原火葬墓		〃	〃	須恵器短頸壺	8世紀代	6
9	平山火葬墓	1号火葬墓	〃 土佐井	〃	須恵器短頸壺	8世紀代	6
		2号火葬墓	〃	〃	須恵器短頸壺	8世紀代	6
10	東山火葬墓	1号火葬墓	〃 東下	〃	須恵器短頸壺	8世紀代	6
		2号火葬墓	〃	〃	須恵器短頸壺	8世紀代	6
		3号火葬墓	〃	〃	須恵器		6
		4号火葬墓	〃	〃	須恵器双耳壺	9世紀代	6
11	勘助野地遺跡	1号火葬墓	大分県中津市相原	〃	須恵器短頸壺	8世紀後半	7
		2号火葬墓	〃	〃	土師器甕、須恵器・蓋	8世紀中葉～後半	7
		3号火葬墓	〃	〃	須恵器短頸壺・蓋	8世紀前半	7
		4号火葬墓	〃	〃	須恵器短頸壺・蓋	8世紀後半	7
		5号火葬墓	〃	〃	須恵器短頸壺・蓋	9世紀前半	7
12	永添遺跡	1号火葬墓	〃 永添	〃	須恵器壺	9世紀前半	8
		4号火葬墓	〃	〃	須恵器短頸壺・蓋	8世紀後半	8
		6号火葬墓	〃	〃	須恵器短頸壺・皿(蓋)	8世紀後半	8
		15号火葬墓	〃	〃	土師器甕	9世紀代?	8
13	相原火葬墓		〃 相原	〃?			9
14	寺迫遺跡		〃 伊藤田	〃	須恵器双耳壺	9～10世紀代	10
15	大谷火葬墓		〃	〃	須恵器短頸壺	9～10世紀代	11
16	森山遺跡	昭和62年度ST1	〃 三光村森山	〃	土師器甕		12
		平成5年度ST1	〃	〃	須恵器双耳壺、土師器甕	9～10世紀	13
		平成5年度ST2	〃	〃	土師器甕	9世紀?	13
		平成6年度ST1	〃	〃	須恵器蓋、鉄釘	8世紀前半～中葉	
		平成6年度ST2	〃	〃	須恵器蓋、鉄釘	8世紀前半～中葉	
		平成6年度ST3	〃	〃	土師器甕		
17	伝大日庵寺火葬墓(?)		〃 八面山(?)	〃	有蓋須恵器短頸壺	9世紀前半	14
18	山本火葬墓群	1号火葬墓	〃 宇佐市山本	〃	有蓋須恵器短頸壺	8世紀代	9
		2号火葬墓	〃	〃	有蓋須恵器短頸壺	8世紀代	9
		3号火葬墓	〃	〃	有蓋須恵器短頸壺	8世紀代	9
		4号火葬墓	〃	〃	須恵器短頸壺・蓋	8世紀前半	9
19	サヤ遺跡		〃	〃?	須恵器短頸壺	8世紀代	15
20	一鬼手火葬墓		〃 四日市	〃	須恵器短頸壺・皿(蓋)	8世紀中葉～後半	9
21	小山火葬墓		〃 杵築市狩宿	〃	須恵器瓶子・コップ形蓋	9～10世紀?	16
22	地藏原遺跡(?)		〃 大分市小池原	〃?	須恵器壺	9世紀代	17
23	丹生火葬墓		〃 大分市丹川	〃	須恵器短頸壺・(蓋)	9世紀前半	18
24	下綾垣遺跡		〃 玖珠町綾垣	土葬墓	土師器坏	9世紀代	19
25	日向塚火葬墓		〃 直入町新田	火葬墓	土師器甕・坏	9～10世紀?	20
26	馬場遺跡		〃 荻町馬場	土葬墓	土師器坏、刀子	9世紀代	21
27	白濁遺跡	1号火葬墓	〃 佐伯市鶴望	火葬墓	須恵器双耳壺、土師器坏	9世紀代	9
		2号火葬墓	〃	〃	須恵器壺、土師器	9世紀後半	9
		3号火葬墓	〃	〃	須恵器壺、土師器	9世紀代	9
		4号火葬墓	〃	〃	有蓋須恵器短頸壺	9世紀代	9

註

- 1 上野精志「火葬墳墓について」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－XX－』福岡県教育委員会 1978年
- 2 小田富士雄「荒堀火葬墓」『豊前市史』考古資料 1993年
- 3 伊崎俊秋編『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告－9－』福岡県教育委員会 1992年
- 4 前川威洋・馬田弘捻・川村 博『中桑野遺跡』新吉富村教育委員会 1978年
- 5 飛野博文『穴ヶ葉山遺跡』大平村教育委員会 1993年
- 6 大平村出土の骨蔵器は上野精志氏により存在が確認されている（註1）。これらの資料は現在、大平村郷土資料館に保管されており、実見させていただいたが、その出土地が錯綜して展示されており、上野氏が作成した一覧表と異なる点が多々みられる。上野氏作成一覧表の126の骨蔵器は諸項目に記載が少ないが、掲載された実測図から、東山から出土していることがわかり、ここでは東山4号火葬墓としてあつかいたい。上野氏が逝去された今では、これらの事実関係の確認をなす手立てもないが、そのアプリオリは上野氏にあり、その他は上野氏作成の一覧表に準拠したい。
- 7 村上久和「勘助野地遺跡」『一般国道10号線 中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書（I）』大分県教育委員会 1988年
- 8 栗焼憲児「1993年度 中津地区遺跡群発掘調査概報（VI）」中津市教育委員会 1994年
- 9 賀川光夫・小田富士雄『白濁遺跡』佐伯市教育委員会 1958年
- 10 小林昭彦「寺迫遺跡」『一般国道10号線 中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書（3）』大分県教育委員会 1992年
- 11 村上久和「火葬と窯業集団」『三保の文化』第42号 三保の文化財を守る会 1986年
- 12 村上久和「森山遺跡」『一般国道10号線 中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書（3）』大分県教育委員会 1992年
- 13 植田由美『森山遺跡』三光村教育委員会 1994年
- 14 桑野陽吉「九州の奈良・平安の陶磁」『日田文化』20 日田市教育委員会 1977年
- 15 原田昭一「サヤ遺跡」『一般国道10号 宇佐別府道路埋蔵文化財発掘調査報告書』大分県教育委員会 1994年
- 16 入江英親「平安時代墳墓の一例」『九州考古学』3・4 1958年
- 17 真野和夫「地藏原遺跡」『大分県史 古代篇II』1984年
- 18 片岡 肇「大分県丹生台地出土の骨蔵器」『古代文化』第32巻11号 1968年
- 19 染矢和徳・須原 緑「下綾垣遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報－日田～玖珠間－』第2集 1992年
- 20 佐藤満洋「土師甕使用の火葬墓について」『大分県地方史』26 1971年
- 21 小柳和宏『馬場遺跡』荻町教育委員会 1986年